

報



會

會 岳 山 本 日

110

月 十 年 六 十 和 昭

山の太樺

惠須取岳、その他

富田健一

十勝岳では案外天候に恵れず、四月十二日は三段山へ行つたが、登頂した頃はどの山頂も雲がかゝり、寫真にならず。午後雪が散つて十勝連山が望見出来たが、それでも春霞が漂ひスカイラインがくつきり浮ばない。長閑な春山の漫步にはもつてこいであるが、寫真でも撮らうとする者にとつては、矢張り一二月嚴寒の酷しい空と山との對立に優るものはない。十三日は雨。十四日小樽發樺太西岸行急行船白海丸の室が取れてゐたので下山。小樽の雪のなくなつた阪道を氣恥かしくスキーを擔いで岸壁に急ぐ。船客待合所附近で惠須取方面に天然痘が續出し種痘證明のない者は乗船が出来ないと聞き急いで附近の愛生病院といふのに飛び込んで種痘をして貰つた。昨年就航したと云ふ新碎氷船も思つたより小さく、横濱神戸あたりならば問題にならぬ小船だが、こゝ北海間宮海峡では女王格だ。變つた船首が目につく。岸壁に列をなして乗船を待つ炭礦勞務者の佻し

い門出姿。そして風呂敷包や汚い行李を背負つて簡単な旅姿を眺め或ひはむつとする船室に内鮮老若男女打混り所せましと座を占める光景を想像した時、スキーやリュック姿の自分が吞氣そうに見えはしないかと、何だか陰氣にならざるを得なかつた。すぐに乗り込む氣もせずクレインの動きなど呆然立見し乍ら唯一人の遠出を自ら批判的に眺めたりしてゐたが、乗船してみると二等は狭い乍らも四人詰の室で、真中には卓子もあり食堂もあつて感じは大分明るい。だが何も彼も小規模で退屈して散歩する甲板も碇子なしで寒く、氣を散らす遊び具もなく、買つて來た樺太叢書を繙いたり炭礦事務に歸任する人々の話す炭礦の内幕や、新興市街風景點描に時を費す。餘り内地の文化都市と變つた事の多いのに、遂に二人の新入社員が次第に顔を曇らせ「段々心細くなつて來た。上野を發つ時はそんなに思はなかつたが……」と新調の背廣をさすり乍ら心細げに前途を

案じ出したので、折を見て慰めたり勵ましたりしてをいた。午後二時に小樽を出帆した船は、遙か右方に十勝、大雪など北海道のまだ眞白な山々を見送り乍ら北へ北へと針路をとり、翌十五朝眞岡着。六七時間停船したが不便な上陸と見物する所もなさうなので下船せず、泊居を経てこの航路の終點惠須取に十六日午前三時前入港した。町の背後の丘陵性の小山がぼんやり曉闇の中に感じられ、多からぬ町の灯のまたゝきに寂寥の北國都市の姿が想像されるのであつた。舢舨で上陸するため六時頃迄船中で寢させてくれる。流石に北海道より尙寒く對岸露領より吹き來る朝風はぐつと身に沁みる。眞岡では荷物と同じくモツコで客を移してゐたが、幸ひ波がなくタラツプで舢舨に下りる。炭礦行の勞務者が一人踏み外して朝の海にとびこむ。やつと上陸して一番よいといはれる越中屋（これとて大阪でなら三四流どころ）に入り、先づ連絡をしてをいた町役場を訪ひ、ついで王子製紙の山林所長に面會に行つた。途中右手に見られる小山は何れも坊主山で全く登山の對象とはならない。雪だけの悪路にバスは泥んこになつて走り相當疲れる。おさへつけられたやうなバラツクの汚い家並。新興都市とし

ての形態も未だ整はない未完成炭礦町だ。王子に着くところは流石に格外である。

* * *

先づ私の志した山の範圍を擧げ

目次

- ◆樺太の山、惠須取岳その他……………富田健一……一
- ◆歩 行……………田邊 主計……三
- ◆天幕の火事……………關根 吉郎……四
- ◆南會津の山々……………中村 謙……五
- ◆羽越荒川峽と鷹の集溫泉……………行方 沼東……六
- ◆越後松の山溫泉便り……………川崎 隆章……七
- ◆岩に哭く(詩)……………橋本 三八……八
- ◆「山の繪」續記……………高橋文太郎……九
- ◆北千島ボロムシリ島……………吉阪 隆正……一〇
- ◆圖書紹介…………………………一一
- ◆會員通信…………………………一二
- ◆會務報告…………………………一三

ると樺太西岸の山の内主として惠須取岳、新聞岳（新聞川といふのが多來加灣に注いでゐるから、東峯よりすべき山かも知れず、又惠須取岳と峯續きのやうでもある）

敷香岳、釜伏山、伊皿山等であつた。同じく西岸よりする山でも中部の野田寒岳等は初めから豫定せず右の諸山も一度に全部を登山し得やうとは勿論考へもせず計畫もしてゐなかつた。

先づ恵須取岳とその北の新間山都合よく晴天が続けば釜伏山か敷香岳（これは東側より北大の方々が登つてをられる）をと狙つて来たのである。何れも千キロから千三百四五百米迄の山々。又敷香岳以外は何れも冬期未登の山々である。時局柄地図や情報の手難で、私の計畫した恵須取岳登頂のコースも現地に來てみると多少の訂正を加へられ、又釜伏山の如きは恵須取町又は鶴城を根據とせず珍内より

島内第一の景勝地ライチン湖畔を通りライチン川を溯る等、略圖から樹てたプランとは可なり相違を指摘される始末だつた。

恵須取岳（は町より王子製紙の輕便鐵道に便乗。大平に至りそれよりエヌトル川に沿つて茶々（上エヌトル）迄上る。ここで一夜社宅のお世話になり翌日頂上へ向ふのであるが、その頂上への取りつきに於て茶々側よりするのと釜伏山方面より縦走し來るコースに依るものと何れが難易、興趣の有無など全く未知数であつて、茶々より頂上迄の間に於ても途中一夜のピバークはあり得るかも知れない。

山好きな所長が私の計畫一切を



聞かれた後考へ込むやうにして「出来るだけの御援助はして差上げるが今は最も悪い時期」であるとして、雪崩、熊の出る頃、木材の搬出、一ヶ月おくれた石炭の積出し等で全力をあげてゐる途中の山々の様子を説明の上、寧ろ二月頃三四人のパーティーにて登るやう極力すすめられた。失望の色は隠せなかつたが、地元の人々の親切を無にすることもならず、そのまゝ釜伏、敷香岳等の登路、小屋に就いて説明を聞く。

西岸第一の名山釜伏山には珍内よりライチン川をどこ迄も登り。（途中迄馬場が大低使用可能）、六合澤との合流点にある造林小屋に一泊。翌日は支流六合澤を辿つて登頂する夏期コース以外は今の所知られてゐない。頂上から北へ恵須取岳への縦走も可能ではあらうが吹き堅められた雪上にスキーを擔いでトラバースし得るコースが発見出来るかどうか。

伊皿山は有名な熊の巣だそうで登山の対象としては如何なものであらうか、むしろ鶴城山の方がよくはないだらうか。又西岸よりする敷香岳には恵須取町より船又は馬場にて名好に至り一泊。翌日名好川に沿ふて頂上へ、途中一夜ピバークの後到達の筈。最後に奥の山容だけでも一望するため、内路

への横断がよからうと次の如きコースを教へられ宿泊その他についても紹介、貸與等の便宜を計つて頂くことになつたが、これさへも不運な天候に阻まれ（樺太當地方は降雪が終る頃もよく雨天となり容易に晴天が続かない由後になつて知る）断念の餘儀なき始末となつたが、その横断コースは夏期のパスウェイであつて、第一日（恵須取町—茶々）、第二日（茶々—白雲峽）、第三日（白雲峽—内惠屋）、第四日（内惠屋—東岸内路）と順調に行つて四日コース約百十キロ、バスでは勿論半日コースである。

このプランで些か生氣を取戻した私は十七日品切れとなつた果物など嗜好食料の買入と神社参拜をなし、のんびりした一日を過した。十八日朝王子製紙に立寄つた上出掛ける豫定をしてゐたところ、早朝より物凄風（ヤマセ）が雨を伴つて吹き荒れ、十九日は雨が雪となる不運。今日二十日も朝の内は少し晴れたが晝前から又雨となる。この間隔の延滞、沖への避難などあつて春四月も下旬だと云ふのに此の國樺太はまだ内地の冬の状態から抜け切れないのである。

以上の如く不運な山旅であつたが來春再度の訪樺に就き、連絡、小屋、食糧などの諸點につき大い

に得る所のあつたことを以てせめてもの收獲とせねばなるまい。私は二十二日の白海丸に船室を豫約小樽へ向ひ、二十八日夜歸阪する豫定である。

（四・二〇樺太恵須取にて）

（三頁續き） 交通機關を利用するに當つて彼様にセカ／＼するのは害がある。又その際に特に秩序が無いのは困ることである。

現在歩いて足を強くするといふ方面のことがしきりに言はれてゐるやうであるが、都會に於ける秩序のある歩き方や乗物についての注意等まわりの人々のために氣をくばることを子供のうちから學校に於ても家庭に於ても教へる必要がある。人はよく山の生活の楽しいことを言ふが我々が山でくらす日数は極く僅かであるから（私なんかは休暇を全部その方に使つたとしても二週間であるからあと五十週間は都會にゐるわけである）都會での生活も出来るだけよくしなければならぬ。公衆の生活でもう少し禮義をわきまへもう少し他人の邪魔をしないやうに心掛けるだけで意外に大きなうるほひが與へられると思ふ。殊に近來世の中へ現れて來た人々のうちに良くないものが多いのは遺憾である。

歩 行

田邊主計

近頃急に歩行のことがやかましく言はれてゐるやうに思はれる。都會の人々は乗物に頼るから足が弱くていけないとか、二軒以内は歩けとか、戦争には足の強いことが必要であるとか或ひは歩行の科學的研究であるとか又はいや當國の人は骨格や足の形から言つても弱くはないとかいふことが新聞なんかにもよく出てゐる。停車場の賣店には「歩行」といふ雑誌さへ並んでゐるではないか。これは歩行について人々が大いに關心を持つて來たのだと思ふから誠に良いことだと思ふ。

一八八八年即ち明治二十一年に水力電氣の調査の爲に北米合衆國へ出張を命ぜられた父は彼地の大都會ニューヨーク等で往來の人々が秩序正しくサッサと歩いて行くのが誠に心持よく印象深く感じられたといふことであつたが昨年（一九四〇年）當地の或新聞に掲載された米國印象記中にも正しく同じ事柄に感心してゐる所があつた。「履物のせいならんか」などと書添へてある。そうして見ると兩者の歩き振りを比較して五十二年後の今日も同じやうに感心させられてゐるわけである。彼地と比較

をせず當地の様子だけを見ても、往來の人々の歩き方が誠に亂雑と言へる。左右に搖れてひどく不安定であり又歩調が一定してゐない。私が毎朝下車する停車場の階段を一ぱいになつて降りて行く人々は階段を降りるうちは危いから急がないにしても平地へ來て改札口へ行くまでを實に疲れたやうにノロノロ歩いて行く、從つて階段の人も先がつかへて早く降りられないことになる。そうかと思ふと化物にでも追かけられてゐるやうに急に改札口を駆け抜けて行く人もある。人につき當つたり何かして。自動車で行つたりすると急に飛び出して來る人があるがこれは自殺でも何でもなく、その先にある電車かバスかにはあはてゝ乗らうとする人なのである。オリンピック・ゲームの入場式なんかで當國の役員なんかの行進が他國の人々に比しむすばらしいといふ事を言つた人があつたが、私もかつて見たニュース映畫の中の有名な人の葬儀に棺を守つて兩側に行く人、それにつゞく人々が今にもつまづいて轉倒しそうな又は風に吹かれて行くやうな足とも定かでない様子を見た事を覚えてゐる。乗物を常に利用するので足が弱くなるのかどうかは知らないが、大體私の周圍の人々の中でも少し

歩くと疲れる者が多いやうである。まして荷物なんかは大いにかつげない、又歩くことを臆怖がること夥しく、私なんかもすぐ歩かうと言ひ出す者のやうに思はれてゐる。又四階位へはエレベーターを待たずに歩いて行かうと言ふと妙な顔をする人が多い。この點山を歩いてゐる人々は餘り無精をしない。例へば釋泉寺からバンパシマまでを荷も擔いて歩いて行くことを別に苦にもしない連中には一般の人はたゞうちは出來ないのも無理はない。交通機關の發達はのぞましく、大いにそれを利用したい。當國なんかそう發達してゐる方ではないから遠慮する事はない。しかし、（以下二頁下）



講演と映畫の會

日時 十一月二十九日（土曜日）午後六時
場所 九段下 軍人會館

講演

◆山と人との境 神戸商大教授 會員 田中 薫氏
◆山旅四十年 會員 茨木猪之吉氏

映畫

フリッツ・ベツヒルトド撮影
◆ヒマラヤに挑戦して 七卷
何度見ても肉躍り血湧く純山岳映畫！ 一九三四年ナンガ・バルパットの登攀記録

田中薫氏原作東寶文化映畫
◆日本の氷河 三卷

好評の文化映畫！ しかも原作者の講演と今見せる事の出來る絶好の機會
鐵道省國際觀光局作

◆富士山 二卷

海外宣傳用として作られた秀作！ 然も未封切にして恐らく國內にて上映の機なかるべしと言はれるもの、特に本會の爲に貸與せらる。見逃し難き好機會！

◆入場料 五十錢（税共）

◆但し會員は無料御招待致します

◆近日中ポスター、切符が出来上ります。會員諸氏には精々切符の賣捌、ポスターの配布をお世話下さるやう切にお願い致します。

◆地方在住會員で當日參會出來る方は御申出下さい。

一人の部員が、息を切らし乍ら天幕を目懸けて走つて来て「遭難です」と口走つた。さうして一人が即死、二人が蟲の息になつてゐるといふ報告を受けた時は、眼の前がくら／＼して暗くなつた。段々事情が詳かになつて来ると、死んだと云ふのはどう云ふ間違ひであつたのか幸ひにも一人が少し岩から落ちて負傷しただけとわかつた。殆んど同時に、小さな岩の峰を一つ隔て、ある高等學校の部員が落石に當つて行方不明になつた事件があつたと云ふことであるから

幕の火の關根吉郎

多分それとどこかで混線したのであらう。暗くなつた時分に潤澤の小屋から馳つけた部員は、怪我をした山賀は至極く元氣であつて、明日は多分上高地迄一人で歩いて来るだらうと語るので、晩の中に徳澤迄も行つて貰はうとお願ひしてをいた醫專の方にもその旨を告げてどうもお騒がせをして申譯ありませんとあやまつて来た。仲々昂奮の治まらない若い部員を早く天幕に入れて休ませ、明日の行動等に就いて相談してゐると、丸西のおやちが私の名を呼んだ。顔を出

すとおやちの傍に白い制服に黒いゲートルを巻いた巡査が立つてゐた。

「お邪魔します」と云つて巡査は狭い入口から半身を入れ「怪我があつたさうでどうもお氣の毒です」と帽子をとり乍ら豊科警察署上高地第二巡査派出所と肩書を付け名前の上に長野縣巡査とある名刺を出した。丸



だ何も書いてない白いところを開けて、ペン先の周のインクを拭き拭き、待遠しさに「山賀君でしたな、山賀何と言ひます。」「山賀一です。」「山賀の山、賀は正月の賀ですか。エイイチは英國の英に一ですか。」「ええさうです。」「年は。」「さあ、二十かな二十一位ですか。」「誰も知りませんか、

それぢや二十一としてをきませう。場處は北尾根の三峰でしたな。×高のは四峰です。懸垂中に落ちたと。何米位ですか。」「詳しくは知りません、本人が明日下りて来ますから、聞いてからお知らせします。」「いや、五米位といふ話ですよ。反對にこちらに教へ、要點を手帳に書き込んでゐ

るのであらう、忙しさうに萬年筆を動かした。それだけ書き終るともう用はないと云ふ風に「遅くお邪魔して済みませんでした。どうもいろ／＼有難う」と歸りかけるので、私は「どうか新聞社などに知らせないで下さい。皆そればかり心配してゐますから」と答を聞いてみた。「いや、私の方は署に知らせるをけばよいので、新聞社等とは關係ありませんよ。」斯う言つて暗い途を歸つて行つた。一度でも交番で問答をしたことのある方は、巡査が時間の流れに氣付かないやうな態度をとることを御存知であらう。ところがこの天幕を訪れた人は、原稿のメ切時間を氣にする新聞記者に似てゐた。

それから先の話の續きを始めて、二十分も経つたであらうか、自分達のゐる天幕と向ひ合せに張つてある天幕の邊で何かぼう／＼燃える音がし出したので、入口のところにあつた私は入口を開けて顔を出した。目の前の天幕のつい鼻の先の入口のところが紅い焰をめぐ／＼とあげて燃え出してゐる、裸足のまゝとび出した。焰は天井の方に燃え擴がり、寝袋で叩いた位では火の粉が四方に散るだけで火勢は少しも衰へなかつた。近くに汲んであつた鍋の水をかけた。燃えてしまつたところは大きな穴

となつた。誰かゞ張綱を切つたので、ばつたりとつぶれてわうやく焰も低くなつた。

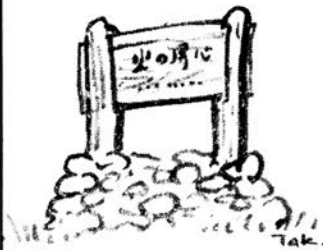
人の居ない天幕が、かうも簡単に燃えてしまふとは今迄考へてみたこともない。雪中露營の炊事焔爐の燃料に揮發油を用ゐてゐた頃には焔爐の具合が悪かつたり、揮發油を入れ過ぎたりした時によく「ぼう」と焰が二尺も上つて肝を冷させられた事があつた。炊事をやつてゐる者が落着いた者だと上手に焰を収めたが、少し周章てる者になると、近くの寝袋を上からかぶせて寝袋を焦したり、「入口を開ける」と叫鳴り乍らぼう／＼燃えてゐる焔爐を雪の上に放り出した。これが怖いので近頃は所謂石油を用ゐるやうになつてそんな目には遭はなくなつたが、寝袋や焔爐は傷んでも、常に天幕だけは大事に守り續けて來たのである。天井が半分以上も焼けて無くなつた天幕を茫然と見守つた。

翌朝、怪我のあつた際に慶應の方に大部お世話になつたので、その御禮にと、河童橋を渡つて丸西の方へ行くと、其處に並んでゐるベンチの一つに昨夜の巡査が整服のまゝ、左右にロイド眼鏡にニツ

カツト

四頁は藤島敏男氏

カーの男を置いて、煙草をふかし乍ら盛んに談笑してゐるところであつた。近付くと向ふも氣が付いて「昨夜は遅く失禮しました」と立上り、一寸氣まづきうな顔ををした。然し天幕の火事は署に知らせなくともよいものなのか、知つてゐる様子は見えなかつた。その午後になつても、その翌日になつても調査の耳には入らなかつたとみえて火事の時刻やその原因等に就いての調査には來なかつた。それなのに、山賀英一(二一)は二日目の各地の夕刊で遭難してしまつた。



會報原稿募集

- ◇山に關するものなら何でも結構です。
- ◇會員外にても投稿自由。
- ◇毎月五日に締切。
- ◇用紙は自由ですがなるべく十五字詰にお願ひします。

南會津の山々

中村 謙

南會津から尾瀬・日光の邊を歩いて來ましたので途中見聞したことの數々を認めて皆様の御參考にいたし度いと存じます。

先づバスを川治で降りて會津西街道を北に向つたのであります。が、男鹿川と湯西川との合流點の海跡から西川を経て船立(獨標五九二米附近)邊までは、追は文字通り海跡だけあつて、道路があまり響くなく却つてそれから奥の方が歩きよく思ひました。

湯西川温泉 先年火災に會つた湯西川は立派に復興はしたものの、以前の落付いた感じがなくなつて、何んだか新開地見たいな感じのするところになつてしまつたのが残念です。殊に伴久旅館の板につかない堂々たる建築には聊か顔まけいたしました。

鯉澤越え 國境を越えて會津へ出るのに、どの案内書にも越野峠から東大窪峠を越えるやうにかいてありますが、今は殆ど通行出来ない藪になつてしまつたそうです。それで我々は村の病人が、よく慰斗戸の醫者に見て貰ふ爲めに通る道だといふ鯉澤越えをして見ました。それは地圖にも載つてゐる

移木澤から會津の鯉澤に越えるみちであります。途中に銅藏嶺山や湯西川牧場があるので入口はともよく踏んであります。たゞ悪いのは國境附近でせう。これも最う少し刈拂ひさへすれば立派に通れるみちになります。黒澤の落合からは昭和森林工業株式會社が伐採をしてゐる關係上立派な道が通じてゐます。山ノ神の手前のオイズキ澤とコイズキ澤の間には製材所が有り盛んに仕事をして居りました。

田代山 湯ノ岐川筋から田代山に登るには、製材所跡から登るのと祖母ノ岐澤から登るのちと有りますが、前者は藪で相當難澁いたしました。村の青年が道刈りをして呉れたばかりのせいもありませうが、矢張り葡萄平から祖母ノ岐澤を往復した方がよいでせう。然しこれもあんまり樂なコースとは申し兼ねます。又田代山から西根川筋に出るには、頂上から西北に、それから北微東に走る尾根を降り、林班(19.20)の界(多分館岩村の館の右側の峰ならん)から右に、一旦祖母ノ岐澤の上流に降つた上、滑瀧のある一寸上から左上のヒラに登つて鞍部を乗越し、クズレ澤に降ればよいとの事です。

駒ヶ嶺から大杉岳へ 會津駒から大津岐峠に到る林道は、大分落

付いて非常に歩きよくなりましたが、之に反し近年刈り開かれたばかりの大津岐峠から大杉岳、御池の間は未だ刈端が澤山出てゐる上、所々藪の深くなつたところ等もあつて、通行には少からぬ努力を要します。峠から大杉岳に向つて二十分近くも行つて白檜の林に入ると直ぐ右下へ下る道が有りま

全く感慨無量なものが有ります。白根山 白根山の登路として白根温泉から遠鳥居・不動尊・六地藏を経て血ノ池地蔵に達する點線は今を去る廿五、六年も前から既に廢路になつてゐるにも拘らず——そうしてそれを知らないで這入るが爲めに數多くの犠牲者を出したにも拘らず——少しも改まつてゐないのはいふわけか。こ

根羽澤鐵山 根羽澤鐵山も愈々本腰になつて活動を始めたやうです。清水から橋を渡つて根羽澤に入ると、もう兩側に人夫の小屋や事務所や分教所が櫛比してゐて、昔を知つてゐる我々には、何んだか夢のやうな氣持がいたしました。

四郎峠越え この道は荒れても決してよくなつたとは云へません。初めて完成して、群馬と栃木の兩縣知事が兩方から越した當時のやうな道は二度と得られないでせう。丸沼方面から引いてゐる電線が不要になつた爲め、電柱が所々に打ち切られてゐる無殘な姿は

念として昨年出來上つたばかりの高原歩道を、一度歩いて置き度いものと思ひ、湯元の山の家から歩いて見ましたが、いやはや、相當なみちで、而かも距離があり、初心者には勿論、一般にもうか／＼推奨するには躊躇する道です。部分的には非常によいところが有りますが、鳴物を入れて宣傳するには先づその前にもつと道の手入れをしなければならぬと思ひました。これは全コースを、ぶつ通しに歩くよりも寧ろ適當に切つて歩いた方が餘程賢明だといふやうに感じました。



羽越、荒川峽と鷹の巢温泉

行方沼東

米澤と坂町の間を通ずる米坂線の小國驛に下車して凡そ四キロ程行つたところ荒川に懸けられた赤芝橋といふのがある。

所謂小國峽はその橋下に始まるのだ。白い岩が兩岸から通り流れはいよいよ細くいよいよ深い。上州の吾妻溪谷に似通つたやうな趣もあるが、兩岸の樹木は皆若くこの溪谷に覆ひ被るといふものもないためその奔流はキラキラと陽に輝き極めて明るい。秋草の花咲く道と一緒に横根山の山脚をぐるり半周して流下してゆく。濃紫のクズの花が這ひ薄の穂が柔かに光る道から時々可成り下の方に流れが見えたりした。路傍の岩影にはク

ジャクシダとイハデンドラが非常に多かつた。玉川口の驛に出ると数軒の家があつて物を賣り旅人の休む所等も眼についた。やがて橋を渡り名前の荒川に似ぬ静寂そのもの、深淵を見下し乍ら行くと、向ふの崖に小さい瀧も見えて左の方から玉川が合流する。そこにも橋があつた。

荒川は北の朝日岳と南の飯豊山とに發源してこの玉川口に會し、西流して越後坂町の北に出て日本海に注いでゐるのだ。橋を渡れば一寸した廣場があり何百年かを經た老樹が二本流れに臨んで涼しい樹蔭を作つてゐた。それはこの道が出來てからこゝを通過する旅人の必ず休んでゆく場所であるらしく思はれた。道もそこで二つに分れ左の上へ登つてゆくのは玉川村を經て長者原に至り更らに飯豊山への登山路だ。眞直に行くと踏切りに出た。そこは羽越の國境で白塗りの縣界標が緑の中にくつきりと建つてゐた。暫らく川と離れて小さく區切られた田市や畑や萱野の間を行くと、眞正面に城壁のやうな山が現れた。地圖の五三〇・四米の山陵である。

烈しく荒廢した黄色い急傾斜の山膚を見上げながら金丸の村に着いた。村の家の周りにはきまつたやうに、隠元や大豆小豆等の豆類が小さい畑に作つてあつた。肥料の割にいらぬ豆類が山畑に適してゐるからであらうか。山陵の出鼻近くなると再び川が脚下に静流を現し向ふ岸の稍平なところに農家が段々に建ち如何にもなごやかな趣をなしてゐた。そこは八ッ口といふ村であつた。右へ川に下つて釣橋を八ッ口に渡つてゆく路が見えた。猶も左の荒れた道を歩いて行つた。リヨウメンシダ、シシガシラ、ヲサシダ、クジャクシダ、タニイヌワラビ、ナライシダ、ツヤナシキノデ、イヌガンソク、ジユウモンデシダ等が路傍でよく眼についた。

この邊での荒川は、小國峽と全く違つた風致を呈してゐる。巾廣に白い乾いた川原の一部を、流れてゐるのか、止つてゐるのか判らぬ位の青藍を湛えた水の静かな姿には心ひかれて時々立留つては讚嘆した。迂曲する向ふ岸の川中に突き出した崖上に八ッ口權現の新らしい社が見え、赤松が散生してゐた。しばらく流水の趣きは同じやうな美しさを續けて展つてゐた。山足の凹凸に連れて道も曲つて行つた。西澤橋とか荒谷橋とかいふ小さな橋が左の山谷から走り落ちる渾水の上にかかつてゐた。それは秋の紅葉の美しさを思はせるに十分な場所の連續であつた。

川は道と離れたりついたりして、間もなく片貝の停車場に出た。まことに山間の佇しい停車場であつた。東北らしいガランとした家の前に二三人遊んでゐた子供達が、不思議な表情で私を見送つてゐた。この峽間に育つ子供達のうへのことを考へ乍ら村はづれの片貝橋を渡つた。こゝで汽車は榎峠の長いトンネルに這入るのだ。峠の北に向つて突き出した形に沿つてつけられた道は可成り長いものであつた。川の深淵はこゝでもずつと續き水は青藍に淀んでゐた。形のよい赤松等があつたりイタドリ

の白い花が咲き盛つてゐたりした。暫らくは飽かず眺めてゆく。

この山鼻を三分の二程廻つたあたりで發電所のダムがあつて流水を堰き止めてゐた。もう鷹の巢の湯も間近い。

暗い杉木立をぬけると大内淵の家が兩側に並び、軒先きに小豆が乾してあり若い男女がせつせと蓮を編んでゐる。風穴橋のほとりで樺の古い根株に美事に生育したオシヤグシデンドラを見付けそれを探集した。そこから長い釣橋が見え

對岸の温泉の建物も樹間に隠見した。釣橋にゆく間赤松が綺麗に岩の間から枝をさしのべてゐた。左の鷹の巢山といふのは烈しい崖である。路傍で岩一面にヲサシダの



ルリンダウ、ウメガササウ、ミツバツツジ等が目につき羊歯ではシシガシラが多かつた。その日は温泉から縣道に出ず川に沿つて、高瀬に出た。村上水電荒川發電所を通り川の大迂曲するモウラ淵といふところに出ると、歩いて来た方角の空高く、飯豊山の連嶺が雄偉な山姿を現してゐた。路傍にジュウモンデシダ、クマワラビ、リヨウメンシダ、イハデンド、コウヤワラビ、ツヤナシキノデ、シシガシラ、クジヤクシダ等昨日歩いてきたところのものと同一品種が続いて繁茂してゐた。

観音瀧の名のある小さい瀧があつて、そこから川と全く別れて暫らく畑や田の中をゆくが高瀬の家の二階に赤い布圍の乾してあるなぞが見えて間もなく通りに出た。四五軒の古い宿屋には地方の湯治客が大勢入りこんで往來を行つたり來たりしてゐる。鷹の巢から來た眼には、それら男女の姿も、もの珍らしい位であつた。こゝを通つて温泉橋を渡ると下關の村と停車場に行く巾廣い縣道に出た。

下關驛に來るとその邊の稻田は廣く展けて、最早や餘程黄ばんでゐた。坂町ゆきの汽車は間もなく汽笛を鳴らして驛に這入つて來た。(五萬分ノ一 小國 參照)

越後松ノ山 温泉便り

川崎隆章



きのふ王留溪谷に岩魚を手取りにしながら、谷間の木洩れ日を浴び、苔むす岩にたぎつ瀧、滑、瀑、棚、釜を踏み越え、高捲きつ週行して山伏の怪峯に登頂した疲れも今日は癒えて、ホテルの裏の秋葉山によち湯本へ下つた。六百年前発見された湯本温泉は二、三百年前建築された儘の家も尠くなく、古風な温泉町には春木山を終えた百姓達が滞在し、その子供達が遊んでゐて賑かだつた。新温泉は安齋山形高校教授の湧泉認定に依り三年前新築成つた許りのその名の

如く雲を凌ぐ近代的三層樓の壯大な建物で、こんな山の中にこんな、と誰しも驚くであらう。その三階の風通しのよい青畳に鶯の啼く音や蟬時雨の聲を聴ききつゝい午睡の夢をむさぼつたが、眼覺むれば夕づいた向つ峰の空の濃青さに積雲白く立ち上り、その上の鱗雲の下びに十日の月白く出で、今蜘蛛の鳴き競ふ聲やかで、ヴェランダに出で一服つけると、眼の下のホテルの養魚池にボート漕ぎ滞在客の子供らの聲はしやぎこえ、階下の應接間からは若い娘がひくピアノの音が野鶯の歌を奏でゝゐる。この木の香の新しいホテルも一泊参園からなので、至つて気軽に我々岳人の宿と成り得るのだつた。

「松山鏡」の傳説は小學讀本で習ひ、幼き日の純情に刻まれてあつた。その松ノ山も遠い所のやうに思はれてゐたが、今春三月と四月にスキーに來、又六月の新緑期と河鹿鳴く盛夏期の今訪れて、スキー的にも、山岳的にも、又更に民族的にも、岳人の心をひかないでは置かない、極めて處女的な、未開發な温泉地であることを、私のように今も亦、冬のスキーの若い人らがルックザックをふくらませて、遙々都から慕つてやつてきてゐるのを見ても頷くことが出来るのであつた。人情淳く義理固きは越後人の特質であるが、温泉の人らは皆その心情を反映して客も宿の人らも家族的で、夜は同じ爐を圍んで興じ合ふことも、他の温泉地に見られない嬉しい風景だつた。

今冬の雪飢饉は全國的であつたにもかゝらず、恐らく人の棲まふ所では一番雪のある所であらう松ノ山では、十二月上旬から初滑りが出来るし、春は男子の節句の五月五日のスキー大會でさへ例外なくやつてのけられ、淺野溪谷には七、八月の候も残雪が豊かで、パンツ一つで夏スキーが出来ることを云へば、スキーヤーには如何許り羨望のスキー地であるか分るであらう。このすばらしいスキー地を今まで知らずして、海水浴場のようなスキー場の泥ノコの雪の中で、互にぶつかり乍ら、滑つてゐた人々こそあはれである。然かも上野を終發で立てば、翌朝九時前には着くことが出来るのであるから、東京近郊のスキー場と、時間的に云つても、そう大して差があるわけではないのだ。然かも高山がない代りに、眼路の限り緩急とりゝの丘陵帯や低山帯が連立してゐるので、スキーの快走満點で、何等の危険もなく、日本海の碧波や、佐渡ヶ島や、雪

深き魚沼三山、上越國境谷川、萬太郎、茂倉、苗場山等の雄大な海山の繪巻を眺め乍ら、一年の半分はスキーにのることが出来るのである。しかし乍ら、スキーには極めて處女的のことは、土地の人でも、ゲレンデとは何のことか、シールとは何うして使用するのかわからず、スキーがあつても長靴をはいて曲るのはどうしたらよいのかさへ知らなかつたと云ふのだから、とても可愛く嬉しい話ではないか。所が、笑つてはいけない、その人らが、僅か二、三年後の現在には、皆一流のスキーの名手となり松ノ山スキー俱樂部は結成され、中にはスキー聯盟のバッヂテストにも通り、指導者講習會にもパスして、スキーが初まつて以來やつてくる東京や大阪のスキーヤーで、未だ上手な人に出あつたことがないと云つてゐるのは、何しろ一年の半分もスキーにのり、國民學校の生徒たちでさへ體操の時間にはスッポン(當地の藁靴)に手製のスキーをはいてスキーをやつてゐるのだから、無理のない話である。

このスキーの處女地に、スキー場と名乗りをあげて以來、スキーをのり入れた人は、未だ數へる程でしかないのは誠に惜しい氣がしてならないが、スキー聯盟評議員

の泉楠太郎氏を連れて来た所が、すつかり共鳴して來春（三月）は法政大學のスキー合宿を松ノ山へ持つてくると張切つてゐるし、山と溪谷社主催のバッチテストも來年はこゝで行ふことにしたので、大小スロープが數十箇所連互してゐるので學校スキー部や山岳

團體の合宿、競技會、講習會、對抗レース等には理想的で、將來インターカレッジも行はれるようになるだらう。何しろ一度來て見れば分るのだから、これ以上私がお題目を唱へる必要はない。

今は夏だが、蚊帳の必要もなく、六月は菖蒲が村の至る所に咲き、燕飛び、新緑ひるがへり、初夏の旅情たのしきものがあつたが、今は山中白百合が咲きかたまり、ホテルの池には睡蓮が一面に咲いてゐるが、ホテルの前を流れる天水川（地圖の越道川）を遊行すれば源流は大川（又は荒澤）と云ひ瀑は連續して腰から下、水飛

沫にぬれて天水山登攀が出來（これは六月にやつた）、きのふは支流土地倉川王留溪谷を遡つて山伏山を極めたのだが、その他幾ヶ嶺（地圖高田東部）、正面倉山、岩見堂岩（これはロッククライミングに好適の岩場）等があるし、松ノ山へ入るにしても、冬は信越國境

岩に哭く

橋本三八

いよいよ問題の大瀧に打つかつたのだ、

どこにも

人間を受けつけるスキのない濡れた岩壁は

眞正面から抱きすくめてかゝる

行きづまつた——

行きづまつた——

（岩かげからセセラ笑ふものがある）

たれが退却するものか！

眼は剌明に岩の面を探して歩く——

ある ある たつた一つ傾斜をもつた壁

（しかしそいつは捨身でかゝる最後の切札だ）

二人の眼はなほもスキを見つけてゐる

「引返そう！」

Nのあきらめた言葉に問髪を入れなかつた

「こいつを登る！」
私は最後の切札に残したその胸壁に挑んで行つた

わづか手の平が留まるほどの傾斜面である

（おれは大事を仕出かすのであらうか

いや自信は持つてゐるぞ 乗切つて見せる）

足が Nの肩を離れると

着たものを取られたように冷たい 寒い

素裸——

二十米 三十米

ザイルの重量が身體を背後から引倒すやうに

感じる

掴んでゐるコンクリートの岩の疣に

それに命を頼んでゐるのだ

冷たい——

冷たい——

（その間の生存の長さよ）

最後に手が伸ぶと 私は濡れたヤシヤブシの

根を掴んでゐた

（止つてゐた血が昂つてきて 何か暖い瞬間）

素早い意識が自分の身體を確保すると次の Nに叫んだ

そこで 血の氣のない寒い顔を二人は見合せ

た

あとはバンドを横に抜け切ると

瀧の眞うへに超越してゐた 問題は解決した

のだ

（ゴムのように神経がグリーンと伸んだ）

瀧の下を覗いてみた 水も底も見えない

音だけが どこかにきこえてゐる——

——急に悲しいようなものがおし上げてきた

おし上げてくると私は泣いてきた

ポロポロに胸が（涙が出るのではない）

ま一人の自分がさんざんに哭いてゐるのだ

痙攣してゐるやうに動かす

立つたまゝ

哭いてゐた。

（雨の阿蘇ツベツキ谷遊行より）

横断、野澤温泉志賀高原連絡、國境連峰縦走菱ヶ嶺より妙高へ走破等のツアコースがあるが、夏は上越線六日町より八箇峠越え十日町、石打より十二峠越え田代の七ツ釜を見て外丸、湯澤より清津峡小出嶺泉經由外丸、苗場山より秋山郷經由外丸、草津温泉より野反池、秋山郷外丸、野澤温泉より天水山越えもあり、この逆もよく第一流のツア、又は山旅が出来るのである。

秋はお姫様紅葉と云つて、葉が眞紅に染まる美観は有名で、山ぶどうが葡萄酒のように熟するのを木に登つて食べたり、きのことりに興じたり、林間落葉をたいて酒をあたくめることも悪くなく、山の見透しも利くし、雪近き山の秋のよさが偲ばれる。

次に新温泉には我が國有数のラヂウムを含有してゐることで半身不隨、痛風等の人が人脊に負はれてくるのが、一月もゐない間に歩いてかへるし、服用には胃腸衰弱消化不良、便秘、氣管支カタル貧血病、腺病質、糖尿病等の特効があるの、家人や知人にも病む人があれば、同伴すれば随分と喜ばれると思はれる。

今、朝霧が深く月見草のみ黄に明るく咲いて、いづくにか山鳩のなく聲しづかである。

山の繪續記

高橋文太郎



この作家は「繪はうまいが山が浅い」といつた評言も耳にする。云ふ迄もなく、技巧だけが特にうまくて、精神の伴はないものも多い。いはゆる悪達者のたぐひに外ならない。

山が浅いといふことは、その畫面から感ずる山に深みがないこと、延いてはその作家の山への経験や思索が足りないといふ事まで含めて考へられる。兎に角、繪が上手である許りでなく、その畫面から、山が觀者の心を打つてこなければならぬのであらう。

要するに繪がうまい上に、その畫面を通じて藝術性の深さが感じられるものが、良いのであらうが、一寸見渡した處、この程度に水準の高い山の繪が果していくつ求められるであらうか。

瑞西に生れたフェルディナン

ド・ホドラーの名は、吾々の耳にはアルプスと關係深くひびいてゐる。しかし、私はホドラーの繪があるといふベルンとかチューリッなどの美術館を訪ねたこともないし、ホドラーの原畫に接したこともすらないのだから、こゝに記す資格はないのだが、書物などを見て感じてゐる所を少し話の順序として書いて見たい。

高原の人々の生活にまで、あれほど深く喰ひ入つた例のセガンティニと同じやうに、スイスに生れて山國の空氣を呼吸したホドラーであるが、やはり彈丸の如く高い山へぶつつかつていつた作家ではなかつた。むしろ逆に、氷雪輝くアルプスの冷徹なる自然から、その作畫精神が多くの影響を被つたといはれる。この人の主要作品とされるものは、自分の理想を通じての人間の深刻な姿であつた。畫材として扱はれた惱める人々の峻嚴な姿のめぐりには、アルプスの透徹した冷たい大氣が感じられる。

随分以前、ホドラーのアルプス風景を描いた色刷などを見て、心を凝らしたことを思ひ出す。むしろホドラーの全身を打ち込んだ作品には、山國の人々の姿が刻明な彫刻のやうなりアルな筆致をもつてその畫面に生かされてゐるので

あるが、作家ホドラーの偉大さに愈々感心させられる。これら畫面の人々を觀てゐるとやはりアルプスを感じられる。

ところで、ホドラーの山を描いた水彩畫が、わが國にも來てゐるといふと、不思議なやうな氣もするが、それが最近私の知つてゐる畫商の手に入つたのである。惜しい事に直接その原畫を見る機会を逸した。畫商に會つた時、是非見たかつたといふと、ドランやルオリなら早速お眼にかけるのだつたが、ホドラーなもんで云ふ話だつた。ドランもルオリもボナールも勿論見たいが、ホドラーの山の繪だからねと、大いに残念がつて言つたのである。その水彩畫は雜誌に色刷にされたので見たが、何でもないやうな輕いものだが、眺めてゐるとよい。

明治から大正末期にかけて大きい足跡を残した富岡鐵齋翁の作品に富士山がいくつもある。南畫系統のものを一番多く描いたが、あり來りの南畫などではない。どうしたことが、作品には偽物が多いので、一般には未だそれほど眞價が知られぬやうだが、洋畫家の間にも注目されつゝある。八十九歳まで長生して晩年になるほど、その繪が若々しく輝き出してきただから。日本人としては珍らしい。

い。翁は儒者でもあり勤王の志に厚かつたから一口に勤王畫家ともいはれるが、作品のよいものは素暗らしくよく、調子も高かつた。その質のよい點では、外國作家の本格的な繪とも相通する所がある如く思ふ。若くして死んだパスキンの翁の非凡なるデッサンやその自由な手法に感心したといふのだから益々面白い。

翁の繪に接したのは、今から四年前の遺墨展が始めてだが、その後も收藏家の所で大分見せて貰つたので、作品の大體の輪廓は判るやうになつた。大抵の日本人の作畫傾向が歳をとるに従つて簡素になる傾向の多い中であつて、翁はそれとは反對に益々稠爛として輝いた畫面をつくつた。字も面白いが、繪も晩年になるほど美しくなつてゐる。顔料としての朱土や緑青、群青、俗緒などを巧みに鮮かに積み重ねていく手法は、洋畫式のもので、こつてりした質感のものがある。水墨、淡彩、すべて面白い。

この翁が富士山へ數回登つてゐる。そして、頂上だけを大きく描いたりしてゐる。尤も翁の全作品から見れば、富士山の圖などは主要な位置を占めないかも知れぬが、吾々には見逃せないものがある。



こゝに書いてきた、ホドラーも亦わが鐵齋翁も、吾々の今の意識から、山の作家とは云へないであらう。が、これらの巨匠の作品には、心を惹かれる山がある。處が、山と直接取り組んでゐる作家の繪から、山を感じないことが多い。

山に慣れ過ぎてしまつて、却つて山を没却してしまつてゐる場合があり、或は山を知るの餘り山を怖れて、筆の延びない場合もある。又どうかすると、山を歩いてゐながら、安易に山を片付け過ぎてゐる人々もある。

點の相異に基くものであらうが、吟味する餘地が残される。安井氏の山の繪のいくつかには、自然觀照の深さと美しい高度の繪畫的な表現が見出されると思ふ。

高い藝術性をもつた山の繪が良きものとすれば、作家の優れた素質、才能とかそれを現はすに足る畫技といふものが、求められる。作家のもつ、山への實踐や經驗の

多少は、この場合、むしろ副次的な必要條件とも考へられる。

終りに臨んで、今の作家の山の繪で印象に残つてゐるものの中、幾つかを記して見る。足立源一郎氏の高い山々を描いた制作、中村善策氏の山の風景、若手では石川滋彦氏、倉員辰雄氏などの新鮮な山の感じを捉へたものなど。石井鶴三氏の山には水墨によいものが

ある。安井さん、藤島さんの描いた山々は作畫意識や畫の傾向において對蹠的であるが、何れも深く印象にのこる。この他の作家にも勿論よい作品があるが、一般から見れば概して調子の低いものが多く眼に止るのは、吾々から言ふと残念である。少しでも山の繪の水準が引上げられ、吾々をたのしませて呉れる事を期待したい。

北千島 ボロモシリ島

吉阪隆正



ら、船は出帆を五、六時間ものばして、積荷の追加を行つてゐる。何だか貴い時間をみすみす捨てゝゐる様な氣がしてならない。船の目的と我々の目的とが違ふのだから、どうにも致し方ないことだ

が。汽笛のなつた頃にはもう陽も大分傾いてゐた。楽しみにして來たチャチャブリの沖まで、日の暮れ前に行けるだらうか。

港を出ても海は静かだつた。沼にわく蚊の様に、数多い鳥の群が水平線の彼方にまで認められた。併しやがて夕暮れを待たずして船はあの有名なガスの迷園に入つてしまつた。帯狀にのびたガスの高

さは五十米もあらうか。それが海面上に蛇行してゐて、頭の上には時々青空を仰ぎながらも、水平線や、島は、否さつきまで見えてゐた。夥しい鳥の姿さえ見えなくなつてしまつた。寒い、冷たい空氣の

濃んでゐる所、ガスは一段と濃く、まるで船縁に接してゐる灰色の水に頭の上まで包まれてしまつた様な氣がする。水が液體から氣體になるその界目を船は前進して行く。前も後も、上下も、左右も全く謎の幕に蔽はれ、すべてが靜かに沈んで行く。空想の世界だけ

が翼をひろげてとび出した。まだ見ぬ千島の姿をあれやこれやと想像して見る。子供の頃に聞いた珍しい寶の島、魔法の島？ それとも餘りにも現實的な、人工に汚された島？

中部千島の伽の様に美しいといはれる山々の姿は、結局事務長の話から推察するより他になかつた。そして四日の朝にはガスに包まれたまゝ、ボロモシリ島の西南端、カバリに着いた。低く垂れた雲は頭をおさえる様にひろがつて一面にうす明りを擴散してゐた。

併し、初めて接する島の姿のあまりにも鮮やかな色に驚く。みどり、みどり、たゞ一面のみどりの丘が続いてゐる。所々に残された殘雪の白と、その周囲の僅かな褐色の地肌を除けば、何もかもがやはらかいみどりに包まれてゐる。

ふと上を見上げると、あれほど密だつた雲が切れて、山頂が見える。馬の背山や白煙山などの千米級の山が、まだ豊富な雲をたぐえて、誠に崇高に聳えてゐるではないか。手前には棚引くガスを突き通す様に鋭い圓錐峰が黒々として迫る。明日には上陸出來るだらう。さうしたらと胸が高鳴る。

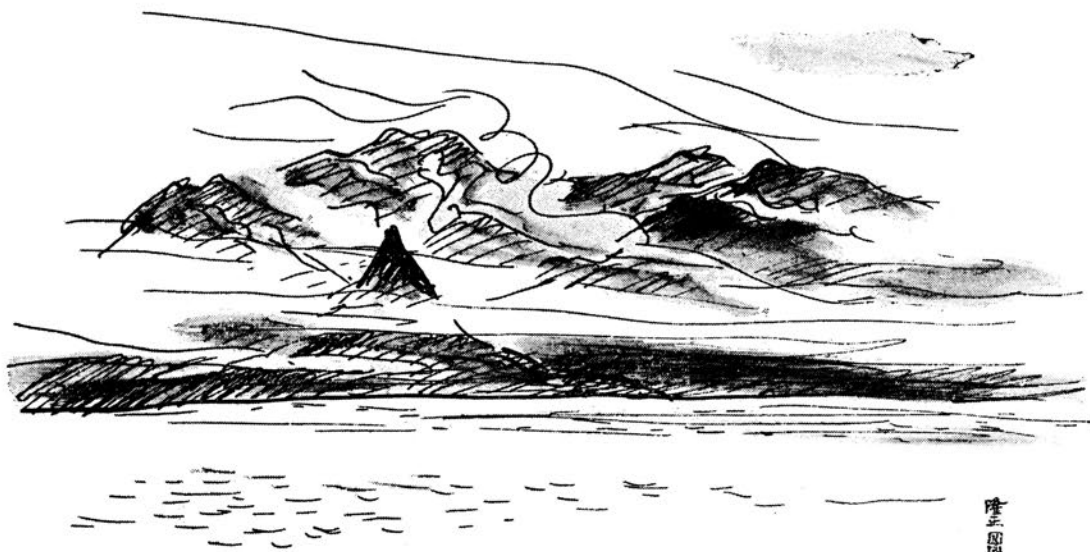
それから一週間経つた。調査の都合や、船の都合で、中々たつぷり一日といふ餘裕がない。それに

島で千米の山といへば、本當に海拔千米あるのだし、山岳廿七年二號や、關西岳聯4號の報告によつても、いつも、道がないために往復十時間以上を費してゐる。おいそれと午後から暇になつても出掛けられない。まして一人では漸く近くの高台まで行つて、山嶺に戯れる雲を眺めて、自ら慰める外なかつた。

ボロモシリ島には三つの山脈系が考へられる。一つは南三分の一位の所で島をはずに横斷してゐる千倉嶽から白煙山に到るもので、之は最も高い。その西に後鐵岳が獨立峯として、コニーデ型の美しい姿となつて聳えてゐる。東にはカムチャッカの、方に向つて次第に高くなる一連の火山群がある。その後者の北端の一つ、硫黄山（一二三四米）に漸くひまをぬすんで登つた。

基地の柏原を出掛けたのは内地の午後の二時半だから、島時間の午後四時。上で硫黄を採掘してゐるので立派な道が灌木地帯を縫つてついでゐるとはいへ、かなり時間はおそい。彫刻家の加藤顯清氏と時計を氣にしながらトットと登る。

春丈ほどもあつた灌木が稀になつたと思つたら、禾本科の草も急になくなつて、岩がそちこちで頭



陸王図

を見せる様になつた。このあたりから雪溪もかなり多くなり、谷間の南斜面を埋めてゐる。頂まであと一時間もあらうか。

下に残して来た一行との約束の時間は刻々迫る。だがこの晴天、この機會、又と得られるものではない。終に意を決して再び頂へ急ぐ。ツガザクラの彈力ある觸感、庭石の様に點在する熔岩塊を縫つて進む面白さに疲れることを知らず、いつの間にか頂上直下の雪田に辿りついてゐた。

頂、それは廣い積の河原だつた。併し頂上に立つた喜びの前に、先づ正面の雲海の上に聳えるアライト富士のあまりに美しいのに驚きの聲を發せずには居られなかつた。逆光に青く光つて浮び上つたその圓錐形の山に、手にとる様に見えるその頂の峯々に、しばしは全く恍惚として立つてゐた。地球の北の果からうちよせる白銀の雲の波の中に、それは今日の日本の最北端を守つて嚴として立つてゐた。

やがて、北方にのびる尾根にも犀角嶺が赤い背と黒い崖を見せてゐたり、左手にはオホーツク海に落ちる尾根の切り立つたシルエツトのあることにも氣がついた。更に南には各所に白く噴煙を見せてゐる廣い火口もあつた。そして

つと遠い南方には後鐵岳らしいいかげも見られた。だが、それらはまるで問題ではなかつた。

見とれてゐる間に、雲は山裾を巡つてシムシュ島との海峡の方をもおほひ出した。さつきまで縁に輝いてゐた別飛や郡司ヶ岡に、ボカッ、ボカッと白いかげが浮び出ては、それが次第にひろがって行く。

その雲は丁度禾本科の植物の終つてゐる五百米位の高さに發生してゐた。そして雲の上は太陽の光でまだ暖かつたし、下にはひるまの暖かさがこもつてゐてそこも暖かだつた。だのに雲の層の中はぞつとする程冷々としてゐた。物理の法則が嚴として行はれてゐる面白さ。科學はこんな世界に發達するのではないだらうか。お互に勝手なことを考へながら、黙つて下る二人はやがて驛選の灯に迎へられた。

正誤

會報一〇九號掲載長白山踏査隊参加記左の通り正誤致します。

頁	段	行	誤	正
五三	一	西半	東半	
五五	一九	獵區	獵道	
六三	一九	西方向	東方向	

小生何か思ひ違ひによる誤りがあつたのでせう(竹内亮)

大阪展不開催について

今秋の本會大阪展は輸送の不確實等の爲め終に豫告の通り開會出來ず御期待に背きましたことは誠に遺憾に存じます事情の許す限り來年の充實せる展覧を期して居ります。

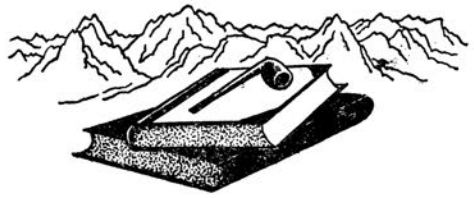
昭和十六年十月

日本山岳協會

會報七十五號讓られたし

本會々報の五一——一〇〇號合本の賣出は中々の好評でしたが、何しる製本部數僅少であつた爲め忽ち賣切れてしまひました。其後申込は續々とあつたのですが、實は七十五號が一部もストックがない爲にどうしても製本が出来ず、皆斷つてしまつたのです。所が未だに申込が絶へませんので、それ程希望があるものならばと、七十五號だけ再版しようとしたが印刷屋の方で斷られました。

會員諸氏の中で七十五號の不要な方がありましたら探し出して譲つていただけませんか。必ず相當のお禮を致します。どうぞ熱心な希望者の爲にお骨折をお願い致します。(事務所)



図書紹介

「霧の山稜」

加藤泰三著 朋文堂刊

加納 一郎

町會の人と争つてプリプリしてゐるところへこの本が来て、あけて繪を見て、讀みはじめて、たうとうしまひまで手を放さず、不快はいつの間にかうつつと消えてしまつて、日本の山のよさと、それにびつたりあてはまつたこの著者の才を讃美せずにはゐられなかつた。「霧の山稜」と題する二頁つゞきの繪には、

俣松の香に噎びつゝ霧疾き

山を描きて午たけにげりと書いてあつた。「岩尾根を」といふ繪には

岩尾根を渡り歩めば晝を近み

日向の岩はあたゝまりあるとある。携帯燈をくゝりつけたバンドのところだけを晝面一杯に大きくかいてあるのに、ひつくりしたが、それには
ひもすがらヤツケに吹雪く雪の音
「やまさりつゝ暮れはてにける」と一首、繪のことは自分には判らないが、どれをとつて見ても、墨筆一管をもつて、素朴と眞實とをひしひしと感ぜしめ、誰しものかつて經たところのものを、搖りさまさずにはおかぬやうな魅力の上に、謙虚でしかも輕妙な文章が、はつと考へさせ、またほゝ笑ませる。詩のなかに、紀行文のなかに、隨想においても、街氣といふものが微塵も見えないのが、何よりも有難い。こいつが、二こと目にはアルプスやヒマラヤを引合に出さねばすまぬところでは、必ずつきまといつて来て、坦懐な讀者を困らせるのである。ヒマラヤも結構であるが、開樂地の奥の馬場の上で縮み上つてゐるヒマラヤを食などは畫にもならない。「飯盒の残り飯を驛のベンチで震へながら食べてゐると、上役らしくない驛員の人が、熱いお湯をくれた。とても有難かつた。お禮に一袋残つた水砂糖を上げた。今頃あの驛員氏は驛長さんだらう。」かゝ

登山もありけりと題する文と繪のなかの一句である。電話をかけて驛長に橋を用意させておくのはずるぶんのへだゝりである。「霧の中にサルオガセが揺れてゐた。シラビソの梢が重なつて續いてゐた。遠く近く濡れた喉と咳は、落ちる雫の音だつた。行けども行けども深く暗い密林の中だつた。もう長い間、僕はその中を歩いてゐた。身中でが湿つてゐた。これは「霧」といふ題のものだが、このほか雨や吹雪の場面が多く、繪を見つゝ文を讀んで行くと、自分の肩にも雨がしたゝるかと思はれ、身についた雪をはたきたいやうな氣になる。それでゐておもしろくも暗くもならない。獨創的な構圖が目をつかせるからである。高みから雪の樹林を見卸した一八一九頁の繪など、見てゐると滾々としてスキー行の回想がわいて來て際限がなかつた。また山やスキーで固つてゐるのではなく、身邊居常のことも掲げてあるがなかなか面白い。かつと照りつける日の好調子の紀行文や、よそ行きの着物をきたやうな山の繪の澤山あるなかに、才筆にのつた謙虚と素朴の一本が興へられたのは決して無意義ではない。單色印刷も成功してゐる。

登高行 (X)

一九四〇

慶應山岳部部報

立派な部報である。冬山を中心とした部の動きがよく解る。冬の北尾根、冬の早尾根より八峯、の二章は全く完備した報であり、我々の参考となる點も多い。

雪洞露骨の報告は非常に謙遜して書いて居るが、日本には雪洞に關してこれ程しつかりした經驗を有する團體は殆ど無いであらう。今後雪の山に確實な知識と經驗を有する、各學校山岳部に於て、雪洞の研究がどん／＼進められて行く事を希望する。そして雪に對する知識、經驗の足りない一般登山者が、雪洞に關して無茶な研究を行ひ、雪崩に埋められたりして無駄な犠牲となる事等、無い様にしたい。

雪洞の研究をはじめ、天幕用ストープ、器具・食料・燃料のリスト等に於て、此の部が昔から有する登山に對する着實な研究的態度が良く現はれて居る。しかし、科學的なやり方に多少缺點もある。例へば器具のリストに、Uテント二貫五百匁、圓テント三貫二百匁、シヤモズ十匁、ティポール四匁等と記されてゐる。そして合計三十

七貫四百五十匁等と、匁の桁まで出している。テントやマットは濡れればすぐ一貫や二貫は重量を増すから、合計をこんなに匁まで算出する事は意味をなさぬ。ティポールの重さを計るより、テントやマットの水分による重量増加を驗べの方がより重要だと思はれる。

以上、本書を讀んで一寸思ひ付いた事を書いたが、とにかく一見否熱讀に値する部報である。最後に本書編輯中、新高山でなくなられた編輯員の一人、故大森君の冥福を祈る。

(佐野和夫)

執筆者紹介

富田健一―本會關西支部代表者
田邊主計―會員、「エヴェレスト」の著者

關根吉郎―會員、前早大山岳部チーフリーダー

中村謙―會員、府立一商教諭
行方沼東―會員、しだ類の研究者

川崎隆章―會員、「山と溪谷」編輯同人

橋本三八―會員、日鐵八幡製鐵所山岳部員

高橋文太郎―會員、民族學研究者
吉阪隆正―會員、早大建築科教務補助

加納一郎―會員、大阪朝日記者、極地研究者

佐野和夫―會員、早大山岳部員



信通員會

上州大揚ノ温泉
にて

川崎隆章

沼田中學校の尾瀬室を安達校長の説明に依り見學後、當温泉に一泊、冷涼の峡谷の朝に目覺め、片品川を股までつかつて對岸の老神温泉に浸つて、又川をわたつて歸つて來た所です。今日は尾瀬へ入る日、原の龍宮を視察、長蔵小屋は昨年十一月以來なのでぜひ一泊、八月九日の槍枝峠の村祭りに間に合ふように着いて、村芝居を見たり、會津駒龍ノ門ノ瀑から源五郎尾根を登つて中門嶽へ出、湯ノ花温泉から會津田島、若松と出て、福島から土湯温泉に至り吾妻山、安達太良山に登る豫定です。

(九月七日朝)

滿洲だより

笹田泰治

拜啓 私事去月内地を發ち十一日無事當地へ参りました。當地は四圍を山々にかこまれ、重疊たる山々がその後に控へて居ります。一度機會を見て歩き廻つてみやうかと思つて居ります。やがてあの物すごい寒さが押寄せて來る事だらうと思ひます。スキーがやれゝばなあ！とそれを楽しみにして居ります。敬具

(九月十二日)

北海道だより

望月達夫

最近封書の發送を許されましたので御便りいたします。小生儀公務にて當地に参つてをります。天氣の不順な中長い汽車の旅が憶ひ出されます。あの時見た鳥海山も頭を雲にかくしてゐました。函館の新開で來道者氏名中に藤島さんの名前を見出して大へん懐しく思つたことも既に大分前のことになりました。

當地に來た頃は夏の盛で北海道と雖も、さすが暑い日が續き見渡す野も山も緑一色につまれてをりました。

風景の至つて美しい所で遠く近くに點在する蝦夷松、白樺の木群など北の國を思はせるに十分な風情です。ポプラの木は風を受ける

とサラ／＼ともシャラ／＼ともつかない爽やかな獨特の音を出して葉の裏を見せます。路傍の赤いダリヤまでが何んだか遠く離れた田園のやうにさえ思はれもしました。今居ります近くは一面の野生の芝生にクローバーが密生し、暫く前は薄紫色の豊かな花が咲き亂れ、その間を月見草やタンポポ、の黄色い花が輝くやうに光つて居りました。

八月も下旬になつて空行く雲の色にも秋の色が濃くなつてくると今迄霧の彼方にぼんやりしてゐた日高の山々もはつきりと紫紺の大らかな姿を現はして、北大の方々の憶ひ出も悲しいペテガリ岳を中央にして札内岳、ポロシリ岳、茅室岳等の雄峯が招呼の間に聳立し、美生川の溪は深く刻まれて朝夕の莊嚴な姿は全く筆舌の外です。

初めて見る北の山は全く魅惑的の一語に盡きます。殊に空腹な子供の前に置かれたポタ餅のやうに、登りたくても登れない現在の小生にとつては尙更憧憬の情己みがたいことも御想像下さることゝ存じます。ペテガリにはまだ頂稜

に近い澤筋に一ヶ所残雪が光つてをりました。

大體晴天の日は朝はすつかり霧がつゝんでゐて、八時頃になると山々は次第にヴェールをぬぎすて、朝陽に耀きます。そして谷の峽間には短い虹が立つて時の経過するに従ひ、虹も少しづつ移動するのが面白い眺めです。夕は山の背に落日を背負つて又スカイラインが黄金色に隈取られ一種神秘的な景觀を現出することも稀ではありません。晴天と言つても雲一つない日は少く、形狀不可思議な雲が天の一角に屯する日が多い爲か、かへつて光線が複雑になつて、景色の美しさを立體化してゐます。總じて濁りのない色彩の自然界はあのピサロやシスレーの風景畫を見るやうに鮮かでさえあります。

牧馬、牧牛の美しく肥えてゐることも珍らしいことの一つ、馬は名産地だけあつて實に見事であります。これ等は又青山熊治氏の大形のカンヴァスを思はせるに十分です。

さて會も新秋を迎へて、愈々活躍をされる時と存じます。「高山深谷」の素晴らしい出来ばえを期待してゐます。織内君からの御便りで浦松さんの新著が矢張り同氏のものにたがはず手堅いものであ

ることを聞き、田邊主計氏の、只今いたゞいたお葉書では著者はあの程度では不満ならんと御通知を下さいました。が、誰か堂々と書評され、好著に報ひられるやう祈つて居ります。それから當地へ來る前一讀した「登高行」の最近號も會報に是非レヴューがほしいものです。新聞で見たのですが、鹿野氏の「山と雲と蕃人と」や、田部さんの「ふるさとの山々」の新著は如何なものでせう。みな歸つてからののおたのしみにして置きます。

織内君の新著も好評のことを信じて疑ひません。先日塚本さんの御便りで會員が千名を突破したことや、會員の田口一郎氏がスイスで逝去されたことを知り、短い間にも色々の變つた事があるのに驚きました。お芽出たいことや悲しいことやで中々大變なことゝ存じます。當地は既に中秋、朝夕はかなり冷えて参りました。この數日中に草の葉末もめつきり黄色味がゝつたやうです。最後に歌ならざるヌタをお目にかけます。お笑ひ下さい。この中には先月下旬海岸の方へ行つた時の含まれてをります。

渺茫と目地の限りは緑なり
十勝の夏の日盛りを行く
川柳はんの木繁る水邊には川霧

たちて馬の遊べる

遠き山紫紺に浮び白樺の梢を渡る
初秋の風

今日も亦日高の山は青くさえ蝦
夷松ごしに白雲の飛ぶ
蝦夷松の梢彼方に浮ぶ山夕日を
浴びてバラ色にはゆ

さ夜ふけて月さえわたりこぼろ
ぎの葉蔭の聲の淋しかりける

曉の光を浴びて輝やける山のは
さまにたてる虹かな

赤蜻蛉飛び交ふ水のたまりたま
りに影をうつして夕雲流るゝ

九月十三日

川崎隆章

「山小屋」九月號を店頭で見ると
編輯後記にて何者かゞ小生の名を
騙つて山小屋評を下等の用語でや
つてゐて、それを材料に山小屋で
は自己宣傳を行つてゐることにな
つてゐることになつて居ります
が、右は一向に小生の關知せざる
所にして、この逼迫せる世代に、
わが山岳界に斯かる蟲ケラの如き
小細工を弄する小人輩の跋扈せる
ことは誠に慨嘆に堪えません。大
和魂のある人間ならこんな淋しい
眞似は出来るものではないと思つ
てゐます。右誤解なきよう一言申
添へました次第です。

(九月二十日)



會務報告

九月役員總會報告

九月十一日午後六時於事務所開催
出席者 木暮、武田、島山、横、
西堀、茨木、沼井、藤島、中司
木村、早川、逸見、横山、青木
塚本

委任 小島、大島、藤木、中原、
榎谷、冠、交野、額田、村尾、
角田、中村、富田、津田

議題

- 一、定款改訂ニ關スル件
- イ、事業及會計年度ハ歴年制ニ
ヨルヲ好都合ト認ム。ヨツテ主務
官廳ノ意向ヲ聞キ、差支ナクバ次
回ノ役員總會ニ諮リ會員總會ヲ招
集スルコトトス
- ロ、會費變更 次回マデ各自案
ヲ練ルコト
- ハ、定款第二十一條會員總會ノ
招集ハ五日以前トアルヲ十日以前
ト改訂スルヤウ、會員總會ニ諮ル
コトトス

一、岳聯改組等經過報告
關係者缺席ニツキ次回ニ聴取ス

ルコトトス

編輯報告

一、山岳(逸見幹事)第36年第一
號ハ編輯完了近日發行ノ旨報告
ロ、會報(塚本幹事)九月號二
十日以前ニ發行ノ旨報告、尙次號
ヨリ吉阪隆正氏ニ編輯ヲ委嘱スル
コトトス

ハ、高山深谷(塚本幹事)編輯
完了近ク發行ノ旨報告

ニ、山日記(早川幹事)十一月
末發行ノ旨報告

一、小集會ノ件(青木幹事)

ボルネオジャングルノ旅、日石
社員駒野久徳氏、十月三日開催ト
開定。

一、十一月講演映畫會ノ件(塚本
幹事)

十一月廿九日、軍人會館ヲ借用
シタル旨報告。講演者、茨木氏、
田中薫氏、浦松氏等ニ交渉ノコト
映畫一本ハ日本ノ氷河

一、會員千名突破記念ノ件

右ノ意味ヲ含ミ有志晚餐會ヲ開
クコトトス

一、高山深谷刊行記念展覽會ノ件
(鳥山理事)

會場ハ小西、期間約五日間、出
版ヲ待チ開催ノコト。尙關西。九
州ニ開催ノ申込ミニツキテモ善處
ノコト

一、會員増加運動經過報告(塚本
幹事)

一月以來二百名足ラズ、七月以
來百名足ラズ増加ノ旨報告、會報
誌上ニソノ經過ヲ報告シ、尙會員
ノ支援ヲ願フコトトス

一、役員會決議事項中未決分ノ處
理(沼井評議員質問)

役員會決議事項中決議ノミアリ
テ實行ノ有無明カナラザルモノア
ルモ、モノニヨリ發表シ得ザルモ
ノアリ、ソノ大部分ハ實行セラレ
居ル旨各自説明。尙事實未決ノモ
ノハ再検討シ、實行ヲ可トスルモ
ノハ遂次實行ノコト

一、次回役員總會 十月九日(木)

一、入會申込者承認決定六十九名
(多數ニツキ氏名略)

圖書寄贈

袋 一平著

霧水園 岡倉書房發行

右 岡倉書房

黒田 米子著

山の明け暮れ 第一書房發行

右 黒田米子氏

黒田 米子著

山の明け暮れ 第一書房發行

田部 重治著

ふるさとの山々 第一書房發行

右二冊 第一書房

織内 信彦著

堰松帶 朋文堂發行

右 織内信彦氏

愛蔵會報部報雜誌

大阪山岳會 山岳趣味九月

日本ハイキングクラブ NHC 九月

鷗翔山岳會 會報九月號

關東旅行俱樂部 旅路九月號

迪路山岳會 會報四號

東京登歩溪流會 會報九月號

日本アルカウ會 アルカウ趣味

登山とスキー社登山とスキー九月

横濱山岳會 會報九月號

晴れやまの會 晴山九月號

東京アルカウ會 會報九月

關東山岳會 會報十八年六號

日本厚生協會 厚生の日本九月

臺灣山岳會 彙報九月

東京市山岳部 部報九月號

大阪探險俱樂部 白峰九月號

東京野蛭會 のびる九月號

國立公園協會 國立公園七八月號

山鳩岳支會 山鳩九月號

日本女子登山會 會報特輯號

泉州山岳會 葛城九月

東京山麓會 三角點十六號

銀嶺山岳會 會報九月

東鐵やまをとこの會 會報九月

日本山岳寫眞研究會 會報八月

福岡山の會 せふり七月號

青雲山岳會 青雲二年九號

山毘古會 山びこ九月號

東京登山會 會報九月

聖山岳會 聖十月

京都山岳會 京都山岳九、十月號

The Mountaineer, July, August 1941.

The Geographical Journal, May, 1941.

Die Alpen, Juni 1941.

Trail and Timberline, July, 1941.

事務所便り

◆先日臺灣の三日月直行氏が來室下さいました。珍客ですが多忙の爲十分お話も何へず失禮しました。氏は始終佛印や、蘭印を旅行される方なので珍らしい便りをお願いして置きました。近頃少し來室者が減つて居りますが、市内の

會員の方は元より地方在住の方の上京の折は是非お立寄りの事をお待ち致して居ります。

◆非常時局の折柄、役員や會員に公務の爲多忙となる方が増加して、會の事業遂行上色々手違ひを生じ相當面喰つて居ります。しかし又本會の人々が、山に關する多年の経験や技術を、現在國防上に生かして使つて居られる報を屢々耳にする時何とも愉快でなりません。又手不足とは言へ豫定の事業は必ず成遂げるやう努力して居りますから御安心下さい。

◆紙やなんかの制限上、本會々員をこれ以上増せないといふ時期が近く來さうでなりません。推薦下さる方がありましたら精々今のうちにお願い致しうございます。

◆十一月二十九日には別掲の通り講演と映畫の會を開きます。御期待にそへる内容と信じてゐますが、十月中にボスターや切符が出来上つて來ると存じますので、東京附近の方は精々お世話下さるやう特別にお願い致します。(塚本生)

圖書室事務所開室時間

毎日正午開室

月水金 午後八時迄

火木土 午後五時迄

右の時間内に精々御來室の程御待ち致します

編輯後記

別記會務報告に記しました通り、望月達夫氏の代行として私がやる事になりました。今回は塚本氏から月半ばに受け継いだので大變遅れましたが、次からは大いに張り切つて出さうと思ひます。どうか皆様からもしし原稿を送つて、御後援の程を御願ひします。

「會員の聲」・「關西支部欄」等頁を設ける事を主張された方は、どうか中絶のない様お便りを頂きたいと思ひます。その他の方も御遠慮なくもしし御よせ下さい。

(吉阪隆正)

昭和十六年十月三十一日 印刷部本
昭和十六年十一月三日 發行

頒價 二〇錢

日本山岳會内

編輯者 吉阪隆正

發行者 塚本繁松

發行所 東京市芝區新橋二丁目十三番地
電話(四三)一六四九
振替東京四八二九

印刷者 植田庄助

印刷所 成文堂印刷所

配給元 東京市神田區新橋二丁目九番地
日本出版配給株式會社

山と溪谷 第70號

山岳雜誌の最高權威・第70號は工の執筆陣に由り完成せり。毎號賣切絶版に付本社直接又は書店へ豫約を乞ふ。

逗子八郎・川崎隆章・早川孝太郎・高須研吾・吉澤一郎・長谷川末夫・拂田勝穂・池田嘉一・月原俊二・井深勉・四家文子・山田奈良雄・「集中登山報告」昭和山岳會・九州登高會・東京築地山岳會・泰野山岳會・鹽見聖平・富田通雄・深田久彌・安齋徹・高橋文太郎・「秋の山旅新コース六案」編輯部・石倉豐・川崎精雄・中村謙・清水長輝・小野幸・原全教其他堂々二〇〇頁の大冊

定價七〇錢(送九錢) 年種(六冊) 四圓二〇錢

日本の山々

本邦山岳映畫の至寶塚本閑治山岳寫眞の全貌は、萬人待望裡に多大の日子と最高の印刷技術に由り遂に完成。世界に持ち出して耻るなき堂々たる偉容を見よ。

B5版特濃總アト百卅頁定價五圓(送十四錢)

山岳寫眞年鑑

我國一流山岳寫眞家の手に成つた數百點の傑作中より嚴選しB5版の大版一杯に製版した秩入豪華版で全卷廿四枚のプレートとなつてゐるので額入にして半月毎に四季の山岳景觀を觀賞出来る。(部數に限りあり御豫約を乞ふ)

特濃ポストアト 定價三圓八〇錢(送十錢)

登山讀本

山岳に關する總ゆる智識を、我國一流スキー家、山岳家、學者、科學者が分擔執筆して全六卷に分類して隔月に來春より發賣致します。乞御期待。

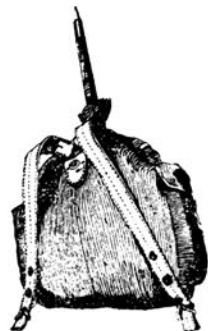
山と溪谷社

東京市芝區田村町六一四
振替(東京)六〇二四九

麻防水布製

キスリング型(E式)

ルックサック



★品質優秀責任保證★

布地見本進呈

特大 二尺二寸 二七・五〇^円

大型 二尺 二五・三〇

中型 一尺八寸 二三・一〇

小型 一尺六寸五 二〇・九〇

◆ハイキング用肩掛バッグ 三・七〇^円

◆門田製シュタイクライゼン在庫品豊富

(公定價格九・五〇^円)

◆テルモス各種・ハイキング用品

東京市神田區神保町三ノ一(専修大學電停前)

片桐テント登山具店

電話九段(33)三二一〇番
振替口座東京九一八四番